

# 異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての 「我々」と「彼等」のコミュニケーション問題 (20) — 「他者」のメディア表象への拘り—

青 木 順 子

Adherence to Media Presentation of “Others” in Intercultural Communication  
Education

Junko AOKI

## 要 旨

2017年1月トランプ政権誕生後、「代替的事実」や「偽ニュース」の言葉で、政権側から公然と事実と異なることが事実として提示される、または、都合の悪い事実は信用ならないものとして貶められる、という驚愕するような言動が民主国家の代表とされてきた米国の政権でも通用することを世界は見せつけられることになる。多種多様なメディアの出現によって、虚構世界と現実世界の物語の境界が曖昧になっている今、他者のメディア表象に拘ることへの尊重が一層必要とされている。社会で優位にあるグループであれば「気かけない」として済ませられるかもしれない出来事について、一つひとつに「拘る」ことで権利を主張する必要がある少数派が社会には存在する。「我が国・自国への愛国心」、「我々・自国中心」、「テロリストの彼ら」、「犯罪者の彼ら」と、「我々だけ」を尊重し、他者「彼ら」への敵対心や恐怖のみを煽り立てる乱暴なレトリックが民主国家の政治の権力側から公然と示され得る時、社会で少数派の拘りの行為が抑圧される可能性は高くなっているのである。ポピュラーカルチャーに見える「ホワイトウォッシュ」から大国の政権による「壁を作る」政策まで、全て関係し合い、相互に影響しないではいられないグローバル化した世界を私達は生きている。ジジェクの言う「人間の顔をもったグローバル資本主義」の実現のために、一人ひとりが拘り、今自分に出来ることを丁寧に問い、真摯な他者とのコミュニケーションを通して実現しようとする、そうした人々を育てることが異文化教育には要求されているのである。

キーワード：異文化コミュニケーション教育、異文化コミュニケーション、異文化教育、他者のメディア表象

## はじめに

異文化コミュニケーション教育では、「他者の苦痛」の表象の背後にある構造的暴力による苦悩をまず正しく理解しようとする必要がある。力の構造に気づき、自分が本当に何が出来るのかを問う力までにはいたるには、正しい知識を土台に、遠い「他者の苦痛」に近づき、知り、

理解し、語ろうとする気持ちになる必要がある。そして、その過程で内的にいただくようになる真理を、多様な真理を持っている他者と語り合い・関わる過程を経て、ともに生きる世界を人間的なものに変えようとする段階に繋げていく可能性がはじめて存在するのである<sup>(注1)</sup>。本稿では、メディアにおける他者の表象に拘り、その背後の力の構造に気づき、互いに語り合うという行為の意味することに焦点をあて、今「自分に出来るコミットメント」を考えることを可能にするために異文化教育のできることにについての考察へと繋げていきたい。

### 1. 現実世界の実事・代替的事実

2016年11月、一貫性のない、矛盾をかかえる政治的主張と他人攻撃に終始する言動、「メキシコ人は犯罪者」、「イスラム教徒はテロリスト」といった人種差別的な言動を繰り返すレイシストで、女性への言動から見て明らかなミソジニー、報道される選挙戦でこれら全てを公然と示しているトランプが米大統領選で勝利したことに人々が衝撃を受けたとしても、実際には、いったん大統領に就任したら、大衆を煽り立てるポピュリズムの言説に徹した選挙戦の言動とは変わってくるのだらうと思っていた者も多かったのではないだろうか。その2017年1月米国のトランプ政権誕生以来、日本での7時のNHKニュースの前半は連日米国の政治ニュースが占めるという日々が続いた。それだけの影響を世界にもたらすのが世界の超大国である米国の政治なのである。就任式直後、矢継ぎ早に出された大統領令は特定の国からの人々の入国を制限するもので、それに対して激しい抗議デモのニュースの報道も続く。その中で、メディアがトランプ政権のバズワードとして盛んに報道した言葉、「代替的事実」(“alternative facts”)がある。ホワイトハウスのスパイサー報道官が就任式に集まった人数について事実とは違う内容を発言—「過去最大だった」と述べたことについて、大統領顧問コーンウェイが、1月22日の米NBCの討論番組で司会者トッドに問われて使った言葉である。コーンウェイは、スパイサーは「代替的事実」を述べただけであると応じ、トッドが、「代替的事実は事実ではない。それは『嘘』ということですよ。」と即座に反論する。コーンウェイは、翌日、FOXニュース番組では、「代替的事実」は「異なる視点」の提供だと説明する。

この「代替的事実」を報道したウォールストリート・ジャーナルは、以下のように説明している。

事実が代替的であるとはどういう意味か。そもそも代替的という言葉は16世紀のフランス語から英語に取り入れられて以降、何度も意味が変化している。語源はラテン語の「alternare」で、「ひとつのことは行ったあとに次のことをする」という意味だ。これは英語の「alternate」という単語に引き継がれた。しかし時の流れと共に「alternative」は「alternate」とは異なる使い方をされるようになり、今では「選択肢や可能性として置き換え可能なもの」という意味になった。語源に近い意味で使われるべきだとする厳格な意見もあるが、現代ではどちらの意味でも使われている。20世紀初期には多くのSF作家が自身の描く空想世界を「代替的現実」と呼ぶようになった。作家キャサリン・ルシール・ムーアの1939年の作品「Greater Than Gods」では、登場人物が「代替的未來が存在していた」と悟る場面もある。1960年代にカウンターカルチャー運動が徐々に広まると、「alternative」は既存文化に挑戦する型破りなものを指すようになる。オックスフォード英語辞典には「オルタナティブ社会」、「オルタナティブ・ライフスタイル」、そして「オルタナティブ・プレス」といった言葉は1960年代後期に誕生したものだと言われている。そして1980年代になると、「オルタナティブ医療」や「オルタナティブ・コメディ

ー)、そして「オルタナティブ・ミュージック」といった表現も使われるようになっていった。オルタナティブ系と呼ばれる音楽ジャンルは、オルタナ系ロック (alt-rock) やオルタナ系カントリー (alt-country) など「オルタナ系」として分類されることもある。やがて接頭辞の「alt-」は音楽以外の分野でも既存体制に挑む非主流派を指す際に利用されることになる。例えば白人至上主義者や単に共和主義の主流派に抵抗する人が集まった極右勢力は「オルタナ右翼」と呼ばれることもある。<sup>(注2)</sup>

主に「事実」が報道メディアによって伝わる現代社会で、メディアに内在する主観性が「事実」の解釈や提示方法に影響を与えており、それが現在の私たちの得ることのできる「事実」の実情ではある。それでも、大衆に客観的に証明し示され得るような「事実」については、「事実」がいかに政権側に不満足なものでも、少なくともそれを「事実」といったん受け取るポーズを示すことが、それまでの米政権ではなされていたといえよう。現実世界で全く事実ではないことを、「代替的事実」、すなわち、「選択肢や可能性として置き換え可能なもの」として提示できると大統領顧問が言ったことに加えて、その言葉がそれまでのトランプや側近の発言で頻繁に見られる言動のパターンを見事に象徴しているがゆえに、瞬く間にトランプ政権のバズワードになったわけである。選挙戦中から、事実に基づかない「フェイクニュース」(“Fake News”)を「事実」として度々引用しては群衆を大いに沸かせ、一方、自分にとって好ましくない事実として報道されている時は、「偽りのニュース」や「不誠実なメディア」と攻撃するトランプの姿勢そのものを説明できる言葉と感じられたのである。ついに、事実に基づかない、自分がそうであってほしい解釈が、「代替的事実」として置き換え可能な、事実と同等のものとして提示することが許されると考えていることが言葉によっても明示されたことになる。いずれの統計もそうではないことを示すのにも関わらず「就任式の人出は最大」と言う、大統領選の投票総数ではクリントンに敗れたことを「不正な移民による投票」と言い続け、証拠は一つも示さない、オバマ政権誕生以来「オバマ大統領は米国生まれではない」と主張し、オバマ側から出生証明書を示されても主張に固執する、これら全てが同じ類である。トランプが、選挙戦の途中で、何の説明もなく、「オバマ大統領はアメリカ生まれ」と不機嫌に宣言した時は、丁度トランプへの黒人層の支持の欠如が選挙戦における問題だと言われている時で、選挙のために「代替的事実」に固執できない無念さや苛立ちが言動に出ていたと考えられる。ただし、その直後、「オバマの出生問題を言い始めたのは、2008年のクリントン陣営である」(クリントン陣営は完全に否定)と言い始める。自分が出生問題として言い始めたという証拠が数多くのメディアで放映されたインタビューという形で残っていても、平気でそう主張できるトランプのスタイル自体には変更はなかったわけである。そして、トランプの政治姿勢—「事実」は「我々が言うこと」で、それは「代替的事実」であり、大衆はその「代替的事実」を「事実」として受け止める—は政権を担ってからも変わらないことを世界の人々は就任直後に確認したことになる。

ニュースメディアのOregonLive.comに、「代替的事実」を批判する過程でサイエンス・フィクションの大家の名前を挙げた読者の手紙が掲載される。

「代替的事実」とは新しいものでなく、実際のところ、「代替的宇宙」—自然の法則がもはや適用できないか、または、物語の語り手にとって不都合であるような宇宙—を創作する時、必要なのである。これらの代替的事実とそれを支える事実をもっともよく見るのは、サイエンス・フィクションというとても人気のあるジャンルである。もし我々の新政権が、この代替的事実を、自分達の世界観を説明するのに必要だとするなら、おそらく「政治学」の学位を出す大学は、「政治的虚構」—「代替的事実」(そして、いずれ、代替的歴史となる)によって説明される—とも呼ばれるのに匹敵するようなコースを提供

するべきだろう。そこの教員には、トランプ、パノン、スパイサーを含めることができよう。さらに、アイザック・アシモフ、H.G.ウェルズ、A.C.クラーク、ロバート・ハインライン、アーシュラ・K・ル・グウィンのようなサイエンス・フィクションの大家達でもある。<sup>(注3)</sup>

この手紙に即座に反応したのが、サイエンス・フィクション界の女王と称され、かつファンタジー文学の最高峰の一つとされる『ゲド戦記』の作者、ル・グウィンである。

オレゴンサイトに掲載された手紙では、「代替的事実」を言うという政治家の主張とサイエンス・フィクションの発明を比較しています。この比較は意味がありません。私たち作家は、物語を作りあげます。明らかにあり得ないようなこともあれば、現実的なものもあります。しかし、いずれにしても、どれも、現実のものではなく、すべて発明され、想像されたものです。そして、事実ではないから、それを私たちはフィクションと呼ぶのです。中には、私たちが「代替的歴史」とか「代替的宇宙」と呼ぶものもありますが、私たちのフィクションを「代替的事実」であるとはしません。事実とは、簡単に得ることができるものではないのです。事実であることを示すのは、それがまさにそれしかない、何の「代替」もないことなのです。太陽は東から上ります。太陽が西から上るとすることは虚構であり、それが事実、または「代替的事実」とすることは「嘘」なのです。嘘は、自分の考えを通すため、また、他の人々をだまし、脅し、操るためにされます。サンタクロースは虚構です。そして彼は無害です。嘘は無害であることは滅多にありません。そして、多くの場合、危険です。多くの場合、多くの場所において、多くの人々にとって、嘘つきは卑劣な人間なのです。<sup>(注4)</sup>

「虚構世界」は「現実のもの」ではなく、作家により想像され作り出されたものであるが、それを、創造した側の作家達は一度も「事実」だとは主張していないのである、というル・グウィンの主張は納得できるものであろう<sup>(注5)</sup>。彼女は、この反論で、事実でないことを事実と言うトランプ政権を辛辣に批判している。「嘘つきは卑劣な人間」であり、「嘘が無害であることは滅多にない」。そうした危険な人物や言動がもし虚構の物語で描かれていたら、私たちの大多数は、読者として冷静に読み取れることもできるのだろう。しかし、現実世界ではそうではないことは、選挙中そして選挙後も、集会でトランプの一言一句に大喝采する大衆が示す通りなのである。

## 2. 二重思考の世界

同じ時期に、現実世界で起こっている出来事が虚構世界の物語を彷彿させていると話題となった。「代替的事実」がニュースになっている同じ1月、未来社会を描くサイエンス・フィクションであり、古典的ディストピア小説とされるジョージ・オーウェルの1949年出版の『1984』(Nineteen Eighty-Four) がベストセラーに浮上したこととトランプ政権の誕生を関連づけるニュースが盛んに出てくる。1月25日のアマゾン・ドットコム売り上げ1位となったのは、トランプ政権の「代替的事実」発言で示されるような政治姿勢が人々に『1984』を彷彿させるからだと言われたのである<sup>(注6)</sup>。この誰もが名前は聞いたことはある古典的作品、『1984』は、未来社会で、人々は「ビッグブラザー」の統制を受ける世界に生きている。そこでは完全な「二重思考」が要求される。それを象徴するのが、「戦争は平和」、「自由は隷属」、「無知は力」という、主人公であるウィンストンの勤める真理省でのスローガンである。そして、この二重思考を可能にするのが、この社会で人々が使用する「ニュースピーク」である。

この言語の根本にあるともいえる特徴の「黒白」については、以下のように説明されている。

ここでのキーワードは黒白である。ニュースピークに於ける多くの言葉と同様、この言葉も互いに矛盾しあう二つの意味を持つ。敵に対して使用する際には、あからさまな事実に対しては、黒は白であると厚かましく主張する態度のことをいう。一方、党のメンバーに向けて使用するときは、党の規律が要求するのであれば、黒は白と言いきることのできる心からの忠誠心を意味する。しかしそれはまた、黒を白と信じ込む能力でもあり、更には、黒は白だと知っている能力であり、かつてもその逆を信じていた事実を忘れてしまう能力のことである。その為には絶えず過去を改変する必要が生じ、それは他の一切を包含する思考法によって可能となるのである。その思考方法はニュースピークでは二重思考として知られている。<sup>(注7)</sup>

つまり、黒を白であるという時、信じ込む能力と同時に、逆のことを信じていた事実を忘れる能力も要求され、過去の組織的な改変がそのために絶えず要求される。それによって成り立つ「二重思考」には大事な点がある。矛盾する二つの考えをどちらも同時に受け入れており、党の望む方の一つを「現実を誤魔化していることもわかっている」状態でありながら、同時に、「現実を侵されていない」と自らを納得させる状態である。

二重思考とは、ふたつの相矛盾する信念を心に同時に抱き、その両方を受け入れる能力を言う。党の知識人メンバーは、自分の記憶をどちらかの方向に改変しなければならないかを知っている。従って、自分が現実を誤魔化していることもわかっている。しかし二重思考の行使によって、彼はまた、現実を侵されていないと自らを納得させるのである。(中略) 二重思考はイングソックのまさしく核心である。なぜなら、党にとって最も重要な行動とは、意識的な欺瞞を働きながら、完全な誠実さを伴う目的意識の強固さを保持することであるからだ。故意に嘘を吐きながら、しかしその嘘を心から信じていること、都合が悪くなった事実は全て忘れること、その後で、それが再び必要になった場合には、必要な間だけ、忘却の中から呼び戻すこと、客観的現実の存在を否定すること、そしてその間ずっと、自分の否定した現実を考慮に入れておくこと—これらは全て、なくてはならない必要条件である。<sup>(注8)</sup>

この思考ができるのであれば、完全に信じ切っているとしか思えない様子で、事実でないことを事実として提示することも理論的に可能となる。そして、トランプ陣営の選挙戦から続く発言が、現実ではない現実を都合よく提示して、かつそれを事実であるとあたかも彼らが信じているように見えるだけでなく、それを大衆が受け止めるようにさせる方策をすでに取っているように感じさせるのである。選挙戦では、事実に基づかない、自分達に都合のよいフェイクニュースを引用する<sup>(注9)</sup>、答弁では、「代替的事実」という発想に基き、自分達があらたに「事実」を提示できるとする、自分達に都合の悪い「事実」を報道する既存メディアを「偽りのニュース」として絶えず攻撃する<sup>(注10)</sup>—こうした世界の民主国家の代表国の一つである米国の政権の言動が、「ディストピア小説」とされる虚構世界の言語と思考を多くの人々に彷彿させるということは、恐るべきことなのである。

トランプ政権のこうしたディストピア小説を彷彿させる言動は続く。2月に入って、ツイッターで、主要メディアを「偽りのニュース」と攻撃の上、CNN等のメディアにホワイトハウスで取材拒否する事態もおこる<sup>(注11)</sup>。米政権がこうした行動を公然と取ることができると示した「事実」が世界に影響を与えたことは否定できないだろう。人々の抗議運動も報道され続け、主要メディアも反発を示しているがゆえに、むしろ、そうした抗議や反発にも関わらず、民主国家でも、いったん権力側がここまで前例のない行為をすると、すぐに訂正されることはないのだと驚愕とともに認識させられた人も多いはずである。世界の非民主国家で独裁者がしているのと同じような言動を、世界の民主主義をリードしていると自負してきた国の大統領が出来るという事実は、「やれば・出来るのだ」と他の「民主国家」の政治家達に思わせたのも明らかなのであ

る<sup>(注12)</sup>。トランプ政権発足時に、他にも、虚構世界を彷彿させると言われて話題となったものに、トランプの大統領就任式でのスピーチがある。映画『ダークナイト』の悪役そっくりと話題になった<sup>(注13)</sup>。実際、彼が好きな映画と言われており、あえてマネをしたのではとも、また、本質が悪役に似ているから同じようになっただけでも、様々に説明されてはいたが、いずれにしても、アメリカの新大統領の就任式のスピーチが真っ先に彷彿させるのがアメリカンヒーローの映画の「悪役」の方の言葉であることも、また怖いことに感じられる。

### 3. 虚構世界での「他者の表象」・「ホワイトウォッシュ」

虚構世界と現実世界の両方で私たちに提示される「物語」の境界はこれまでになく曖昧となっている。二つの世界が互いを反映し、同時に影響を与え合う過程そのものがますます複雑になっていることが理由としてある。例えば、人々の記憶に長く残る影響力の大きい大ヒット映画を製作してきたハリウッドの最大の祭典であるアカデミー授賞式は、2017年3月、多様性を認めない人種差別的言動を非難して反トランプ一色の式となると報道された<sup>(注14)</sup>。それに反発したトランプが、式のボイコットを呼びかけるということもあった。しかし、反トランプ色を強く示したアカデミー賞授賞式も、前年の2016年は2年続けて演技部門でのノミネーションが全員白人であることで、「ホワイトすぎる」と批判がおり、何人ものスター達が式をボイコットする事態があったのである。白人だけが優れた演技をしたはずはないから白人が過半数をしめる審査員に偏見があるという批判から、そもそも映画に関わる全ての職種において白人が多いことが問題であり、必然的に白人以外の有色人種に与えられる良質の役がハリウッド映画では少なくなる、といった批判、さらには、社会の差別構造の指摘までと、多様化の欠如しているハリウッドに対して様々な批判が飛び交い、大きな話題となっていたのである<sup>(注15)</sup>。その批判においては、「白すぎるハリウッド」と並んで、「ホワイトウォッシュ化されたハリウッド」という言葉が使われる。この「ホワイトウォッシュ」<sup>(注16)</sup>は、狭義では、白人以外が演じるべきはずの役割が白人に取って代わられることをさして使われる。広義では、白人に都合のよいように状態が変化させられることに使われ、マイノリティグループ文化を抑圧する形で白人文化が取って代わる現象、さらには、力を持った集団一明らかに、長い歴史において、世界では「白人」の「異性愛」の「男性」が最大の力を保持してきたのである一が優先的に力を行使できる状態を確保しようとしている状態にまでに範囲を広げて使われるようになっている。そして、2017年、数多くのノミネーションで話題になった『ラ・ラ・ランド』は、ジャズをテーマとしながら、主要人物をはじめ大多数が白人であることで、「ホワイトウォッシュ」映画としての批判が出た映画でもある<sup>(注17)</sup>。さらに『ラ・ラ・ランド』については、6つのアカデミー賞を受賞した後、授賞式の最後に作品賞受賞と発表され、壇上で関係者のスピーチも始まった後で、実際は『ムーンライト』が受賞作品であると訂正されるといった大ハプニングもあった。その『ムーンライト』は黒人社会を描いていること自体が、皮肉なことと感じた人達もいる。

一度手にしたオスカーを、人に譲るなどという事態は前代未聞。しかし、黒人社会の深刻な実像を低予算で真剣に描いた『ムーンライト』に渡されるべきオスカーが、往年のミュージカル映画をなぞったいわば“白人映画”である『ラ・ラ・ランド』に一瞬でも奪われたという構図は、無益な論争を生みかねない。あえて、直接『ムーンライト』に渡す形にしたジョーダンの機転はさすがハリウッドの住人といった感じ。<sup>(注18)</sup>

アカデミー賞論争の最中の2016年2月に発表された南カルフォルニア大学の研究（2014年のメジャースタジオで制作された109の映画と305のシナリオ、2014年9月2015年9月までの31のネットワークのテレビやデジタルシリーズ、ストーリーミングサービスを調査対象とする）では、11000人超の有声の登場人物を、性別、人種、民族、そしてLGBTのカテゴリーにおいて分析し、同時に、およそ業界で働く一万人の監督、シナリオライター、ショーの製作者、1500人の重役について調査をしている<sup>(注19)</sup>。以下がその調査結果である。414作品において、有声のキャラクターのうちで3分の一が女性で、28.3パーセントがマイノリティグループで、これは実際の人口比より10パーセント程度低い。40歳以上のキャラクターは、男性にかなり偏っており、74.3パーセントが男性で、25.7パーセントが女性、有声のキャラクターの2パーセントだけがLGBTである。11306人の有声のキャラクターのうち、7パーセントだけがトランスジェンダーで、しかも、そのうち4パーセントは同じ番組シリーズからである。全ての調査数値が、米国の実際の人口比を反映していないものとなっている。映画を作成する側の場合は、それがもっと顕著となる。映画監督の87パーセントが男性で、テレビ番組では、特に多様性が欠如しており、90.4パーセントが白人である。監督の15.2パーセント、シナリオライターの28.9パーセント、シリーズ製作者の22.6パーセントが女性である。調査対象の映画のうち女性が監督だったのは3.4パーセントにすぎず、109人の監督のうち、黒人女性は二人だけだった。この調査は最後に「メディアのコンテキストはまだ大部分がホワイトウォッシュされた状態なのだ。」と結んでいる<sup>(注20)</sup>。現実世界の差別意識は、それを生きている人々の言動に現れ、虚構世界での他者の表象に反映される。そして、その逆もある。そして虚構世界を製作する側がすでに偏見のある社会を反映した構造であれば、生み出された虚構世界がその構造を反映するようなものとなる可能性も高いのである。こうして切り離せない形で両方の世界が関係し合っており、虚構世界に現実が反映され、また、現実が虚構世界に影響され、差別を持続、さらには拡大する複雑な社会を私たちは生きているのだ。

さらに、今の社会に溢れている多様なメディアは、私たちに、「物語」を、現実か虚構か、事実か事実でないのかを判断する時間を十分に与えないスピードで与え続ける。つまり、二つの世界の境界の曖昧さと判断の時間の欠如が、多くの人々にゆっくりと冷静に判断をさせてくれないのである。そして、今、非民主国家の独裁者がしてきたようなことを、民主国家でも、権力側が上述したような境界の曖昧さを利用して巧みに詭弁を行使すれば出来ることを示してしまったわけで、さらに両方の世界の境界が渾沌とした世界を私達は生きるしかなくなっている。トランプが選挙戦で何度も「事実」として利用したインターネット上の偽ニュース、多くのフォロワーを得ているだけでなく、綴りさえすれば、(彼が「偽ニュース」と批判する)主要メディアが逐一報道して広まっていくトランプのツイッターのコメント、トランプ政権が公に恥ずかし気もなく提示する、SF小説の「代替的现实」とは全く性質の異なる「代替的事実」、トランプ政権で彷彿されたディストピア小説『1984』、『ダークナイト』悪役のスピーチと類似していた就任式のスピーチ、反トランプのアカデミー授賞式、トランプによる授賞式ボイコット呼びかけ、ホワイトすぎると批判されたアカデミー賞、6つのアカデミー賞を獲得し、ホワイトウォッシュ映画と批判も受けていた『ラ・ラ・ランド』、その映画を読み上げたアカデミー賞作品賞の間違ったアナウンス、実際の受賞作品である黒人社会を描いた映画『ムーンライト』—こうした全ての事柄が、実際には極めて短い間に次々と事実として多様なメディアで提示され、全ての出来事をめぐる「物語」が虚実取り混ぜて、その虚実の判断をする時間も余裕も与えない、そして、発信者(匿名であることも多い)が「誰」で「なぜ」「このように」発信していることを問わせることもなく、私達

に影響を与える。2017年2月、相変わらずNHKニュース番組のトップニュースとしてトランプ政権の言動が報道される日々、その主役を一時的に奪ったのが、北朝鮮の金正日の殺害のニュースである。マレーシア空港で殺害時に関わった女性二人は、日本の「いたずら番組」に出演しているつもりでいたと言っていることが報道された。もしこれが「事実」なら、アメリカでは長年出演したリアリティ番組での有能なビジネスマンのイメージを利用したトランプが大統領になり、アジアでは、日本のリアリティ番組に翻弄された暗殺の物語が一つ生まれている—まさに混沌とした虚構世界と現実世界の複雑に交差する世界を私たちは生きているという感を強くさせられた。そのトランプは、引き続き、3月、選挙戦でのトランプ陣営とロシアとの繋がりについての「ロシア疑惑」に反発して、「民主党が大統領選での惨敗の口実にするために作りあげた虚構」と主張（トランプ陣営は何度もロシア側と接触していること自体は否定できないでいるが）、ツイッターには、「オバマ大統領は大統領選直前の10月に私の電話を盗聴した」と根拠を示さず主張（オバマ氏のスポークスマンは完全否定の声明を出したが）する<sup>(注21)</sup>。一方、トランプに偽りと叩かれて反発している主要メディアにしても、完全に不利益を被っているだけの側ではないのである。トランプ側の「代替的事実」を乱暴かつ一方的なコミュニケーションで与え続けるスパイサー報道官に、政治ニュースを伝えるテレビのモーニングショーも、彼をマネするコメディアンが喝采を受ける人気コメディ番組も、視聴者を引き付け重要な「視聴率」を稼いでくれる恰好の話題を容易く得てはいたのである<sup>(注22)</sup>。様々な立場での思惑が交差して発せられ・受け取られる物語の、その虚構と現実の間の垣根が限りなく低くなった大変な時代に私達は生きているのだ。

#### 4. 論争・拘る

虚構世界と現実世界の関わりが強いからこそ、虚構世界での他者の表象をめぐって論争が絶えず起き、拘る人々が存在する。前節の「ホワイトウォッシュ」批判を引き続き例にしてみたい。本来有色人種がすべき配役を映画では白人が演じるというパターン自体はハリウッドでは新しいことではなく、よくあったことだが、公民権運動以後の人々の意識の高まりとともに、ハリウッド映画が批判を受けることは多くなったといえる。往々にして有色人種の配役を演じられる俳優の欠如がその正当化に使われてきた。しかし、俳優不足の問題は存在しないはずのアニメーション映画でも、この論争は存在することから、「それだけではない」ことは明らかなのである。例えば、2013年、世界的ヒットとなった*Frozen*（『アナと雪の女王』）について、ネット上で、「ホワイトウォッシュ論争」が起きた。最初は一人のプロガーが、映画の登場人物で、土着のスカンジナビア人、サミ人とされている人々は白人ではないはずだと提起したことに始まり、それ以後、ネット上で賛否両論が飛び交うことになる。ディズニーを擁護する人々は、映画は19世紀のスカンジナビアを舞台にしているのだから、有色人種でなくても当然だと言う<sup>(注23)</sup>。一方、批判をする人々は、ファンタジーの世界だからこそ主要登場人物としてどんな人種でも選べたはずであり、実際、200年前にヨーロッパで有色人種を見つけることは不可能ではなかっただろうと反論する<sup>(注24)</sup>。特に、映画の主要人物の一人、クリストファーは、サミ族と設定されており、その彼が金髪の白人であることは、「ホワイトウォッシュ」の典型として批判された。それに対しても賛否両論が飛び交う論争になったのである。2016年秋には、そのディズニーが『ムーラン』の実写版の制作計画において主人公ムーランの相手役を「白人」にするという情報が漏れ

て、同じくソーシャルメディアで「ホワイトウォッシュ」だと抗議が起き、9万人もの人がそれを止めるよう求める請願書にサインするという出来事が報道された<sup>(注25)</sup>。請願を始めた女性は、元々非白人の登場人物に白人の俳優や女優を当てることは、資格のある俳優にとって機会を制限するというだけでなく、映画そのものと観客の両方に「直接」の「有害な」インパクトがあることなのだという<sup>(注26)</sup>。両方の側の根拠として使われた事実の正否は別にしても、ディズニーが、白人を主人公とすることで世界展開において得るだろう興行的な成功、すなわち興行収入を犠牲にしてまで、ファンタジーの虚構世界を創作する側の持つべき意識や倫理観なるものを考える気がなかったことだけは確かなのである。そして、皮肉なことに、その明らかな欠如こそが、現実世界でのディズニーの世界的成功を導いている理由の一つなのである。

第一節に挙げたル・グウィンもまた、自作品の映画化において、メディアにおける「ホワイトウォッシュ」批判をしたことで知られている。2004年、彼女の『ゲド戦記』を原作とするテレビミニシリーズが制作された時、作品の主要な人物が白人であったことを、「ホワイトウォッシュ」であると強い批判を寄せた時である。制作時には、彼女はすでに映像化の権利を引き渡しており、彼女が聞かされていた当初の制作陣であれば任せて安心と思っていたこと、そして、後で彼女が配役や内容を知った時点では変更できる立場にいなかったことを説明した上で、なぜそこまで自分が批判をするのかについて記している<sup>(注27)</sup>。そこでの彼女の論点は以下のようなものとなる。彼女のファンタジー、そして遠い未来についてのサイエンス・フィクションの作品において、登場人物のほとんどは、白人ではなく、有色人種である。例えば、『闇の左手』では、地球出身の唯一の人物は黒人であり、それ以外の人間はみなイヌイット族である。テレビ番組で原作として使われた『ゲド戦記』シリーズ中の2冊でも、ほとんどの人間が茶色や赤褐色の肌である。中心人物の一人、テナーはブルネットの白人であるが、ゲドは赤褐色、友人のヴェルチは黒人である。一方、テレビ版では、ゲドもヴェルチも白人、テナーだけがアジア人風であった。ル・グウィンは、彼女の作品では、登場人物の肌色について自分は「意識して」いるのだと言う。本が最初に出版された時、『ゲド戦記』の表紙の絵がゲドを白人として描いていることに驚愕し失望したこともあったが、今では物語に記した肌の色に表紙の絵も近くなり、販売を損なうから非白人の顔を表紙にすることに躊躇うという出版社側の恐怖感のようなものも以前よりは無い。いずれにしても、作者にとっては「白い顔をしたゲドは嘘であり、本と今から読もうとする読者の両方にとっての裏切り」なのである。また、ル・グウィンは、「主人公の肌の色なんて気にしていない」と言うような読者もいるだろうと認めた上で、肌の色には「気が付かない、気にしない」と言えるのは、白人が、肌の色に拘らないでいることができるような特権を持っているからなのだという。そして、ファンタジーやサイエンス・フィクションのジャンルでは「白人の世界の白人の冒険」以外に読むものがないと分かる青少年時に、『ゲド戦記』がそのジャンルでは唯一自分達も含まれていると感じた本で、それは大きな意味をもっていたという非白人読者からの反応もあり、それが彼女にとってはとても報われた気持ちにさせたとも言う<sup>(注28)</sup>。ル・グウィンは、「文化・民族帝国主義」に陥る—非白人のために声をあげる白人作家、代弁をしようとする、極度に傲慢な行為—というリスクが伴うことは十分認識しているとした上で、それでも作者が創作する虚構世界でできることの自由、美、そして責任を、こう語る。

完全に作り出されたファンタジーの世界において、または、遠い将来のサイエンス・フィクションの舞台において、想像しうる様々な人種からなる世界において、このリスクは和らげられるのです。それ

が、サイエンス・フィクションとファンタジーの美であり、創造の自由なのです。(中略)しかし、全ての自由は責任を伴います。それが、これらの映画製作者が理解していないように見えることなのです。<sup>(注29)</sup>

別の記事において、ル・グウィンはこのようにも説明している。テレビ版映画では、主人公達が白人に変更となり、登場人物のほんの数人だけが非白人であることについて、「これは現実ではないでしょう。ただのファンタジー、ただの映画だよね。問題はない」という考えが制作者の背後にあるのであれば、強く否定をするべきで、実はそれはとても大事なことなのだという。

大事なのです。とても大事なのです。私は人種的に偏狭な国に生きています。私は、『ゲド戦記』を、白人を規範として見る偏見と、その偏見を受容しているファンタジーの伝統なるものと巧くやっていく風潮への意図的な拒否として考えています。もしあなたが白人なら、非白人のファンタジー作品の読者に、それは大事かどうか聞いてみてください。彼らが成長する時、どのくらい自分自身をファンタジーの本や映画に見たのか、そして、それについてどのように感じたのかについて聞いてみてください。<sup>(注30)</sup>

ル・グウィンが述べているように、彼女は白人であり、そのために非白人の気持ちを代弁しようと試みる時のリスクが伴う。しかし、同じく彼女が言うように、たとえリスクがあろうと作品で代弁を試みることは彼女にとっては大事なことであり、価値があることなのである。「虚構世界は現実ではないから設定は問題ではない」ということは間違いであり、自由に創作される虚構世界は実は大きな責任を伴う行為なのである。一節で挙げたように、ル・グウィンが「代替的事実」の説明でサイエンス・フィクションの世界をトランプ政権による「代替的事実」と同類のものとして名前を挙げられた時に即座に反応したのも、彼女の作家としてのこの確固たる信念によるのである。創作された世界は、「これが事実です！」という「ふり」をすることない点で、「嘘」ではないのであり、同時に、創造の虚構の世界であるからこそ、作者は責任をもって、その自由を行使すべきなのである。

前述の『闇の左手』(*The Left Hand of Darkness*)<sup>(注31)</sup>に描かれている「物語」をここでは見てみたい<sup>(注32)</sup>。地球から、かつての植民地、両性具有の人々が住む、雪と氷の冬の惑星であるゲセンに送られた使者ゲンリーは、ル・グウィンが意図的にそうしたと述べているように「黒人」である。ゲセンでは、人々の猜疑心や文化の境界に阻まれて使者としての仕事も果たせない。「愛国心」と「恐怖」の相互関係が何度も異なる人物の口から語られる。唯一理解を示してくれる両性具有のエストラベンとの境界線も完全に消えてしまうわけではない。しかし、ある時ついに、ゲンリーにとっては自分と異なることを一番意識する特性であったゲセンの人々の特徴である両性具有という点について、単性者であるゲンリーが本当の意味で理解し、エストラベンを受容する瞬間が訪れる。そして、その一番異なると感じていたこと、それはエストラベンの否定できない変えられない本質でもあるわけだから、それを真に受容することこそが、エストラベンという人物を受容することなのだとか分かる瞬間でもある。異なるほど、違いがあるほど、他者を理解し受容することは困難なことなのだ。しかし、違うからこそ、そこに友情も生まれ得るということをゲンリーは感じるのである<sup>(注33)</sup>。物語では、ゲンリーが違いを受容することができるようになった直後、エストラベンが死ぬ。希望を見出せるようなコミュニケーションの実現を目前にして失うような展開であるが、その希望自体は失われたのではなく、エストラベンの息子が、ゲンリーに「語る」ことを頼むコミュニケーションに、それが再度提示されるのである。

But the boy, Therem's son, said stammering, "Will you tell us how he died? — Will you tell us about the other worlds out among the stars—the other kinds of men, the other lives?"(p.301) (しかし、その少年、セレムの息子は、口ごもりながら言った。「どのように彼が亡くなったのか教えてくださいませんか。そして、かなたの星々の間の他の世界について話していただけますませんか。他の異なる人々、異なる生活についてです。）」

他者の存在を知る、認める、もっと知りたいと思う、その過程が、私たちの関係の根本にあると何度も繰り返して提示された「恐怖」に打ち勝つ唯一の方法である。だから、エストラーベンの悲劇的な死で、恐怖を超えた後の二人の建設的な関係を見ることができないと一度は落胆した読者には、救いともいえるコミュニケーションなのである。異邦人を知ることを自ら求めた、このエストラーベンの息子も、いつかゲンリーという異邦人を理解する日がくるだろう。そしてゲンリーにも彼を知り得る機会が与えられたのである。こうした他者を知ることを求めるコミュニケーションが連鎖していくことだけが、全く異なるように思える他者を繋ぐ手段となりうるのだ。「愛国心」が異人への「恐怖」を元に声高に叫ばれる時こそ、きっと私達は知らされないまま勘違いをし、異人であると見なされている他者を避け、そして避けたために真の意味での対話をする可能性に閉ざされて生き続けているのではないか、そうさせられているのではないか、と自らが疑う努力が何よりも求められているのであり、その努力をする人間であることにこそ、自らの誇りを見出すべきなのである。ル・グウィンがかつてこう述べている。「物語を使ってわたしたちは現実をつくり直し、出来事を語り直す。ほかの選択肢を想像し、自分の欲望やニーズに応じて生きる術を見つける。物語の真実は事実ではない。物語は人間的な真実を語り、倫理的な問いただしや、人間同士の結びつき、霊的な憧れに奉仕する。<sup>(注34)</sup>」登場人物が米国の現実の社会では少数派とされる人々である—その作者の意図的な拘りがどれほどの意味を読者や社会に持つのかについて、「科学的な統計で示せるような事実」としては誰も示せないだろう。それでも、作家が創作の自由責任を行使した結果としての虚構世界は私たちの世界に何らかの影響を及ぼさずにはいられないことは「事実」だと認めてもいいはずである。そして、作家の虚構世界での「拘り」は、現実世界で私達が「人間的な真実」を希求する「拘り」として応答を期待されるのだ。

## 5. 声を上げる・声を聴く

結局、虚構世界と現実世界の物語は深く関係し合って、相互に影響を与えることは「事実」だと皆分かっているからこそ、人種、セクシュアリティ、ジェンダーなどといった私たちが区分される数々のカテゴリーにおいて少数派となっているグループに属する人々は、メディア表象に拘るのだ。数々のポピュラーカルチャーの出来事一つひとつに反映される社会の偏見に敏感になり、抵抗するしかないと感じるのだ。まして、多大な権力を持つ政治リーダーの言動が、少数派に寛容でない社会を乱暴に示唆している中では、人々はより一層一つひとつのメディア表象に繊細になることで抵抗するしかない。拘りは、声を上げることで示すべきであり、その声を聴く姿勢を要求することも同時に必要とされる。

トランプ政権発足時、米国主要テレビ局の番組を舞台にして「ホワイトウォッシュ」論争がおきた。政権発足直後の1月末、NBCの朝の看板番組「Today Show」の人気キャスターの一人であるタムロン・ホールがNBCを突如去ることが局側から発表される<sup>(注35)</sup>。ホールは、10年間

NBCの人気キャスターで、この3年間は、黒人の女性キャスターとしては初めてレギュラーキャスターとして「Today Show」に加わり、7時から9時まではサブキャスターとして、9時から10時の間は、主要キャスターの一人として、同じく黒人キャスターのアル・ブローカーとともに一時間番組をもっていた。しかし、FOXニュースの看板キャスターであったミーガン・ケリーがNBCと契約を結び、彼女がその時間帯の番組を担当することが知らされることになる。7時から9時の時間帯にはこれまで通りキャスターの一人として残るというNBCからホールに提供された契約は、巨額の契約金と複数年の契約であったが、ホールは応じなかったとも報道された<sup>(注36)</sup>。ケリーに番組を譲ることを言われた時、ホールはかなり動揺したことも伝えられ、いずれにしても、契約をしないで、NBCを去ることを決めたわけである。番組内で挨拶をすることなく去ったホールは、声明で、10年間の経験は素晴らしいものであったことを感謝し、キャリアの新しい章を楽しみにしていると述べている。しかし、ホールが黒人で、ケリーは白人、かつ保守的なFOXの代表的なキャスターの一人であったということもあり、ソーシャルメディアには、これは「ホワイトウォッシュ」であるとして憤る声が増えることになる。ネット上では、こうしたホールの出立について激しく失望する声だけでなく、NBC自体への失望感を記したものも多く見られた。全米黒人ジャーナリスト協会は、公式声明を出し、「ホワイトウォッシュ」と呼んで非難した<sup>(注37)</sup>。声明では、一般的に浮かぶと思われる二つの疑問がこの交代に存在することを指摘する。一つは、ホールの担当する時間帯は視聴率で他局に勝っており、普通、低視聴率を問題に入れ替えることはあっても、その逆はないのであり、ホールの挙げている業績は、罰ではなく称賛を取るべきものであるという世間の常識の真逆であることへの疑問である。二つ目は、入れ替えて入局する形となったケリーが、FOXニュースの自番組では数々の人種に関する攻撃的なコメントで知られていることである。例えば、ミッシェル・オバマによる大学の卒業式のスピーチについて、彼女は「犠牲者としての文化」を引きずっているとコメントしている<sup>(注38)</sup>。つまり、成功している番組をもっている黒人の女性キャスターが、その黒人に対しての無神経なコメントをする保守派の白人女性キャスターに唐突に入れ替えられるという図式は、同じ黒人ジャーナリスト達には、そのまま看過できない、拘るべき出来事なのである。協会はNBCに対して正式な話し合いを求め、それに対して、NBCは、多様性という点で絶えずリードしてきた局であり、引き続き理解をしてもらうよう努力をすると声明で応答している<sup>(注39)</sup>。「メディアの表象に拘る」ことは、「自らの生きる世界の在り方に拘る」ことなのである。トランプ政権の始まりで「ホワイトウォッシュ」にも人々が敏感になっている中、こうして声明を出し説明を求め、声を聴かせようとする側があり、それに対して声を聴くという姿勢できちんと応答する側が存在すること自体には、米国社会はまだ大丈夫なのだと感じた。

さらに言えば、拘る側が声をあげることに影響力があり力を持ちうると知っているから、声をあげられたくない側は動揺するわけである。2016年11月、すでにトランプ次期大統領が決定した後、ブロードウェイの人気ショーをめぐる、論争を呼び起こす事件がおきる<sup>(注40)</sup>。多様性の賛歌を主要テーマにした大ヒット中のミュージカル、『ハミルトン』に、次期副大統領ペンスが観客として現れる。終了時、ステージ上から、主役の黒人俳優が出演者を代表してペンスに向かって「多様性を認める社会を尊重してほしい」という内容のスピーチをする。翌日、トランプは「次期副大統領が嫌がらせを受けた。無礼である。謝れ！」と俳優の攻撃をする。自らがポピュラーカルチャーの産物であるリアリティショー『アプレンティス』で演じた有能なビジネマンとしてのイメージを選挙戦で大いに活用したトランプであるがゆえに、ポピュラーカルチャーの持

つ力が分かっているのだろう。ポピュラーカルチャーの一つ、ブロードウェイショーの一俳優の発言を攻撃する、この一国のリーダーとなる人物の、自分の意思にそぐわない時は他者の自由な意思の発露を止めようとする姿勢は、多くの人に来る政権の性質がどんな言葉で飾られようとも、多様性に寛容ではないことを明示するものとなった。私たちは、今、世界の全ての出来事が、それがエンターテインメントであれ、政治であれ、経済であれ、自国のことであれ、他国のことであれ、何らかの関係性を持たないでは存在できない時代に生きている。だからこそ、私たちは、自分に都合のよいことだけを「代替的事実」として恥ずかし気もなく提示する、自分の好まないことを伝えるコミュニケーションは攻撃する、そうした権力の出現に気が付き、それへの抵抗を言葉にして闘うしかないのであろう。気が付いたら、全てのことについて、事実を事実として提示する可能性を失い、自分達も「二重思考」を与儀なくされているかもしれないのである。

そのトランプ政権の影響で、売り上げが驚異的に増えたという『1984』は、それもあって、2017年夏のブロードウェイのショーとして上演されることが決まった。このショーも『ハミルトン』と同じく、そこで表象されるものに拘りがあるという。同時にそれについて異なる意見を語る人々がいて、お互いに自由に語り合う人々が同じ空間を共有できるという。そうあるべきなのだ。『1984』では、拷問の過程で、ウィルストンは、自らの最大の恐怖の対象を向けられて、その行為は自分ではなく恋人ジュリアにするように叫んでしまう。「ジュリアにしてくれ」と叫ぶ、その言葉で、権力にとっては無害となったとみなされ、放免される。のちにジュリアに遭遇した時、そして、それはジュリアも同じような行為をしたゆえに解放されたことを意味するのだが、二人はもう語り合うことをもっていない。そうした恐怖の世界を迎えないために、私たちは、自らがおかしいと思うことに声をあげなければならないのだろう。そして、その抵抗が、実は、そうした少数派に自分も入りうるという意味では危うい生を生きているという「事実」、その少数派に属する者と同じ社会を一緒に生きているという「事実」、さらには、他者への寛容は自らへの寛容を求める気持ちと同じように尊重するべきだという「事実」、を理解している者であれば、同じように抵抗の機会を行使することができるのである。同時に、機会をもっているがゆえの責任があり、それを行使するべきなのである。そして、自分と反対の立場で声をあげている他者にも、それが権威による力の横暴の形ではなく個々の信念に基づいてなされて、応答できる機会が自分にもある限りは、その声をあげる権利を尊重し、異なること、異なる者の言葉に耳を傾けなければならない。「声をあげる」「声を聴く」という二つの行為が同時に真摯に社会でなされていくことの権利と責任を異文化コミュニケーション教育では絶えず考えさせる必要がある。その思考を尊重することを教えるのは教育で可能なはずだ。

## 6. 「犠牲者側」の反撃

前節に挙げたNBCを舞台にして起こった「ホワイトウォッシュ」論争の中での、黒人のキャスター、ホールと入れ替わった白人キャスター、ケリーによる、ミシェル・オバマへの批判—「犠牲者としての文化」を引きずっていること—について、最後に戻ってみたい。この黒人という長い間少数派で偏見を向けられた「犠牲者」が、いったん強く声を挙げて反撃に出ると、「犠牲者としての文化」をかざしてと批判される—同じパターンを歴史上私たちは幾度となく見てきた。「彼ら」が犠牲者のままで大人しく声を聴いてもらえない側でいる限りは、「我々」は同情できるというわけである。それは程度の差こそあれ、概ね「反撃を理解できない」という形で示さ

れる。例えば、2016年のアカデミー賞をホワイトすぎると黒人の俳優達が批判した時、その批判を自分は理解できないとする声は同業のハリウッド俳優から公然と発せられていた—「成し得た仕事がまず大事で、賞はそれについてくることだよ。私自身は賞については気にしないけどね」という「一度も気にしないですんだ側」にいる白人男性・ロバート・レッドフォードのような、穏やかで道理があるように聞こえる、しかし、その側にいない者には無神経と言えるコメントから、「反対に白人に対する人種差別だわ。あらゆるところに沢山の少数派が存在するまで、これを考えろっていうわけ。」という白人女性・シャーロット・ランプリングの攻撃的な怒りの発露のコメントにいたるまでである<sup>(注41)</sup>。世界はその長い歴史において、「白人」で「異性愛」の「男性」に一番特権を与えてきた<sup>(注42)</sup>。さらに、その特権は、このカテゴリーを一つでも満たすものに与えられる、また複数の属するカテゴリーによって、複雑な形で差別が存在しており、特権のカテゴリーにはいっていても、そして差別意識もないけれど、「彼ら」からの反撃だけは理解できないと反発し始める人もまた存在するのである。トランプが明白な「白人・異性愛・男性」という立場で示す別カテゴリーに属する人々に向ける非寛容な姿勢には、彼が権力と影響力を持っている米国の大統領である今、世界もまた国家レベルで影響を受けていくことを示している。2017年7月27日、トランプはツイッターで、トランスジェンダーを今後は軍に受け入れない方針を表明し、根拠も示さないまま、その理由を「多大な医療費コストと混乱」にあると記した<sup>(注43)</sup>。彼の支持層でもある人々の敏感になる「費用と安全」を掲げたわけである<sup>(注44)</sup>。これは、根拠も示さず、特定の国からの移民だけを米国の安全を脅かすテロリストとなる可能性が強いとしたのと同じ彼の得意のレトリックである。それは、トランプが私人である時は、彼のレイシストの本質を示すだけで済むのだろうが、今は大国の大統領である。国民を対象に、「我々」と「彼ら」の2項対立を促し「彼ら」を作りあげて、明白な差別意識を示すことには躊躇いがあるが、それでも「彼ら」からの反撃には反発したい、そうした人々に理由を与える危険なものなのだ。そのレイシストの性質を世界に再認識させる事件も続いている。8月、バージニア州でデモのため集会した白人至上主義者の団体とそれに反対する市民グループの衝突で死者も出たことについて、トランプが出した声明は白人至上主義者については言及せず、「白人至上主義者のウェブサイトで喝采を浴びる」ものとなった<sup>(注45)</sup>。激しい批判を受けた、その二日後、ホワイトハウスの演説でKKKとネオナチの白人至上主義者団体の名前を挙げて非難をしたが、すぐ翌日のインタビューでは「双方に非がある」と答えている<sup>(注46)</sup>。

同じ8月には、「メリット・ベース」制度を採用し、英語や高い教育水準を持つ移民を優先し、今後10年間で移民を半減させるという、共和党議員の法案への指示をトランプは表明し、「我々の経済に貢献する」移民を優先すると述べる<sup>(注47)</sup>。その「我々の経済」は、米国人が避けてきた労働に従事した外国人労働者によって実現した安価な労働力と、世界規模で展開している米国企業の製品を消費者として購入する数多くの他国民が世界に存在してこそ繁栄してきた事実は忘れたフリをするらしい。ジジェクが『脆弱なる絶対』でNATOの戦略について記した箇所である。

保護の対象である<他者>が善良であるのはその<他者>が犠牲者である限りにおいてである（だからわれわれは、みずからの苦しみについて語る無力なコソヴォの母親、子供、老人の写真を何枚もみせられるのだ）、という犠牲者化のパラドクスである。<他者>が犠牲者としてふるまわなくなり、自力の反撃を望んだ瞬間、それは突然テロリスト／原理主義者／麻薬取引の<他者>にかわってしまう……………。

<sup>(注48)</sup>

そして、ここで重要なのは、この「グローバルな犠牲者化のイデオロギー」の中、取りも直さず、それは「〈人間〉主体を「痛めつけられるもの」と同一化する」ことなのだが、そこにこそ、グローバルな資本主義のイデオロギーが存在するということであり、「〈資本〉の〈現実界〉の支配」ともいべきものなのである<sup>(注49)</sup>。トランプ政権が単純化して声高に叫ぶ、「自国への愛国心」、「我々の愛国心」、「自国の利益」、「テロリストの彼ら」、「原理主義の彼ら」、「犯罪者の彼ら」、「混乱を起こす彼ら」、「迷惑な彼ら」の一連のレトリックは、「犠牲者」側を犠牲者側でいるように強迫するパラドックスであり、他者にいつまでも犠牲者でふるまい続けろという脅しでもある。それは取りも直さず、「彼らの苦痛」を見続けることに無神経でいるグローバル社会に居続けることを唱えているのである。

### お わ り に

ジジエックは、トランプの有名となった決まり文句「壁を作る」の「壁」についても、9年前の2008年出版の『暴力』で述べている。確かに、寛容な多文化主義的アプローチの限界、つまり、「『壁をこわして、みんな受け入れよ』という、心優しいリベラル『急進派』の気楽で空虚な要求が解決にならないことは、いまや明らかである」と認めよう。だからこそ、唯一の真の解決は、『本当の壁、すなわち移民局の壁ではなく、社会・経済的な壁をこわす』ことである。つまり、ひとびとが自分自身の世界から必死に逃げようとしなくなるように、社会を変えることである。<sup>(注50)</sup>」だからこそ、今、また、あらたに「壁を作る」ことを唱えるのは、そして、実際にそれが、効果があるフリをするのは、もっと空虚なのである。何よりも、「彼ら」のためではなく「我々」のために、「彼ら」を防ぎ「我々」を守り、という一連の「我々一番」のレトリックは、その「彼ら」は時代・地域で変わるにしても、古今東西、典型的な人種差別者の使うレトリックである。経済を含めすべてのことが密接に繋がっているグローバル化した世界で、一国の政治リーダーが「我々一番」を目指すと高らかに謳うなら、「彼ら」はそのために、「我々」を潤してくれる奴隷であることを公然と要求するのと同じことであり、「我々」と叫ぶ自分の国は、同じことを叫ぶ他国にとって「彼ら」の国となる時、「戦争」が最終帰結となる。

ポピュラーカルチャーを舞台にしての「ホワイトウォッシュ」論争から世界の大国の政権による「代替的事実」、「非は双方にある」の発言、そして「壁を作る」政策まで、私たちは全て関係し影響なしではいられないグローバル化した世界を生きているのである。ジジエックの言う「人間の顔をもったグローバル資本主義」の実現のために、「構造的暴力について正しい知識と理解を得る」努力とともに、「一人ひとりが・拘り・今・自分に・出来ることを、丁寧に問い・声をあげ、かつ、耳を傾け・異なる他者とのコミュニケーションを続け・それを通して得た真理を・実現しようとする」その過程そのものを尊重できる人々を育てることを異文化コミュニケーションは目指すべきであろう。

- (1) 青木 順子「異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての『我々』と『彼等』のコミュニケーション問題（19）—異文化教育における「他者の苦痛」—」安田女子大学紀要 No. 45, pp. 75-90, 2017.
- (2) 「トランプ政権の『事実』と『代替的事実』」『ウォールストリート・ジャーナル』、2017年1月27日.
- (3) “Alternative facts are not new. In fact, they are necessary when creating an alternative universe, a universe where the natural laws we know no longer apply or are inconvenient to the storyteller. The most common place to find these alternative universes and their supporting facts is in the very

- popular genre of science fiction. If our new administration has determined that alternative facts are necessary to support its worldview, maybe the universities now offering degrees in Political Science should offer a parallel set of courses called Political Fiction, supported of course by alternative facts (and eventually, alternative history). Faculty candidates could include Donald Trump, Steven Bannon and Sean Spicer. They would fit in well with SciFi legends like Isaac Asimov, H. G. Wells, Arthur C. Clarke, Robert Heinlein and Ursula K. Le Guin.” (“Alternative facts, alternative universe appear in science fiction: Letter to the editor,” *OregonLive.Com*. January 31, 2017)
- (4) “A recent letter in The Oregonian compares a politician's claim to tell “alternative facts” to the inventions of science fiction. The comparison won't work. We fiction writers make up stuff. Some of it clearly impossible, some of it realistic, but none of it real - all invented, imagined -- and we call it fiction because it isn't fact. We may call some of it “alternative history” or “an alternate universe,” but make absolutely no pretense that our fictions are “alternative facts.” Facts aren't all that easy to come by. Honest scientists and journalists, among others, spend a lot of time trying to make sure of them. The test of a fact is that it simply is so - it has no “alternative.” The sun rises in the east. To pretend the sun can rise in the west is a fiction, to claim that it does so as fact (or “alternative fact”) is a lie. A lie is a non-fact deliberately told as fact. Lies are told in order to reassure oneself, or to fool, or scare, or manipulate others. Santa Claus is a fiction. He's harmless. Lies are seldom completely harmless, and often very dangerous. In most times, most places, by most people, liars are considered contemptible.” (“Ursula Le Guin on fiction vs. ‘alternative facts’: Letter to the editor,” *OregonLive.Com*. February 1, 2017)
- (5) ル・グウィン、評論集でも、こうした物語の真実と事実との関係を何度も明快に述べている。以下は、その一例である。“What reality may be, what really happened, we cannot tell; what we can tell is the story, the infinitely flexible, wonderfully rearrangeable, extremely useful story. With it we remake reality. We remake it according to our desires and according to our needs. The truth of story is not fact. Neither is it wishful thinking. Story tells human truth, serving human community and spiritual longing.” (Ursula K. Le Guin, *Cheek by Jowl*, Aqueduct Press, 2009, p. 119).
- (6) 「小説『1984』がアマゾン1位に、『もう一つの事実』で売り上げ急増」(*AFP* 2017年1月26日)
- (7) Orwell, George (訳) 高橋和久『1984』早川書房、2009、pp. 325-326.
- (8) Orwell, pp. 328-329.
- (9) 「〈トランプ氏〉偽ニュース発信? 『スウェーデンでテロ』」毎日新聞、2017年2月20日。
- (10) 「トランプ氏は自身に批判的なCNNテレビの記者らの質問をたびたび遮る一方で、保守系FOXニュースの番組を称賛したり、『好意的な記者を見つけたい』と話しながら質問者を指名したりするなど『トランプ節』を全開させた。会見を生中継した複数のテレビ局では、キャスターが大きなため息をついた。米メディアは『歴史上、驚きの瞬間』(CNN)、『メディアを非難、中傷。会見は戦いの場に』(ワシントン・ポスト紙電子版)などと異様さを伝えた。(中略)『情報漏れは完全に本当だ。(しかし)ニュースは偽だ。なぜなら多くのニュースは偽だからだ』などと独自の主張を展開。『私は(報道の)論調を見ている。憎しみに満ちた論調だ』と不満を表明し、自身に好意的でない報道が偽ニュースだとの認識をにじませた。」「トランプ大統領 会見で独演会 一貫性欠く持論まくし立て」毎日新聞、2017年2月17日)「『フェイク(虚偽)ニュースメディアは米国民の敵だ』。トランプ氏は17日、ツイッターにそう書きこんで、ニューヨーク・タイムズとNBC、ABC、CBS、CNNテレビと、いずれも米国を代表するメディアを名指しで批判した。(「トランプ氏 就任一か月 攻撃姿勢続く」読売新聞、2017年2月20日)
- (11) 「トランプ米大統領、CNNなど異例の取材拒否=『人々の敵』と非難」時事通信、2017年2月25日。
- (12) 「ルベン氏メディア批判」読売新聞、平成29年2月28日。
- (13) 「米ドナルド・トランプ大統領が現地時間20日に行った大統領就任スピーチが、クリストファー・ノーラン監督作『ダークナイト ライジング』の悪役ベインによるスピーチにそっくりだと話題になっている。ベインは、「バットマン」シリーズに登場するスーパーヴィラン。『ダークナイト ライジング』ではトム・ハーディが演じ、ゴッサム・シティを大混乱に陥れた。問題のスピーチはベインがゴッサム・シティを掌握し、刑務所の前に陣取って「われわれは腐敗した奴ら、金持ち連中、チャンスがあると思わせてあなた方を抑圧してきた奴らからゴッサムを取り戻した!そしてわれわれはそれをあなた方

に返そう。人々に (we give it back to you - the people)」と言うというものだ (ベインはその直後に刑務所から凶悪犯たちを解放し、街は無法地帯と化した)。一方のトランプ大統領が群衆の前で語ったのは「今日、われわれは単に権力のある政権から次の政権に受け渡すのではない。われわれは権力をワシントンD. C. からあなた方に返すのだ。人々に (giving it back to you - the people)」という言葉。わざわざ悪役の演説をパクる必要もないだろうから偶然なのかもしれないが、間の取り方でそっくりだとしてアメリカでは大きく報じられ、二人の演説をつなげ合わせた動画やトランプ大統領の映像にベインの声を当てた動画なども作られ広く拡散されている。ちなみにトランプ大統領は『ダークナイト ライジング』のファンであり、同作を褒めたたえる動画も2012年当時YouTubeにアップしていた。」(「シネマトゥデイ」2017年1月23日)

- (14) “Kimmel then wasted no time putting the A-list audience in a political frame of mind. “This broadcast is being watched live by millions of Americans and around the world in more than 225 countries that now hate us,” joked the 49-year-old Kimmel.” (“ ‘Moonlight’ wins best picture as Oscars end in chaos,” *The Japan Times*, Feb.28, 2017)
- (15) “how is it possible for the 2nd consecutive year all 20 contenders under the actor category are white? And let’s not even get into the other branches. 40 white actors in 2 years and no flava at all. We can’t act?! WTF!!” (by Spike Lee), “But we are rarely recognized for our artistic accomplishments. Should people of colour refrain from participating all together? People can only treat us in the way in which we allow. With much respect in the midst of deep disappointment.” (by Jada Pinkett Smith, the wife of Will Smith) (“Spike Lee to boycott the 2016 Oscars over lack of nominee diversity,” *The Guardian*, January 18, 2016) “As of 2012, 94 percent of academy voters were white and 77 percent of those voters were men. The demographics of who makes movies, writes movies, edits movies, produces movies and stars in movies are equally stark. According to a 2014 report by the University of California, Los Angeles, on diversity in Hollywood, only 10.5 percent of lead actors in movies from 2011 were people of color and only 7.6 percent of movies from that same year were written by people of color.” (“The Oscars and Hollywood’s Race Problem,” *The New York Times*, Jan. 22, 2016)
- (16) The intention in Whitewash is to illustrate the ways in which whiteness express itself through representation but that these cannot be understood without reference to wider political and economic conditions. (Gabriel, John, *Whitewash*, Routledge, 1998, p. 17) “The constitution of whiteness is never a once and for all; it has always been a process of becoming. This is in part because, as Toni Morrison argues, it has always been developed in relationship to otherness and otherness which change according to different historical circumstance. (Gabriel, p. 49)
- (17) “Count Rostam among the few standing against Ryan Gosling and Emma Stone’s new jazzy musical *La La Land*. ‘*La La Land* didn’t have a single gay person in it #notmylosangeles,’ he wrote. ‘Furthermore, the people of color written into the script were not really important to the story. John Legend gave a great performance but his character was what? A sellout? Who made uncool pop music? Black people invented jazz but now we need a white man to come save/preserve it? Sorry, this narrative doesn’t work for me in 2016.’” (“Rostam Has Some Serious, Pointed Criticisms Of ‘*La La Land*’” *Proxx*, 12. 21, 2016.) “Damien Chazelle’s new film - out January 13 - gives a lot more than most musicals, but ultimately fails by casting white actors in a film about jazz music” “We constantly hear Gosling explaining how he will save jazz, while behind him black men play the music *they* created. It’s patronizing at times, with scenes showing Gosling playing jazz piano as the only focal point of the camera, or Stone dancing to jazz, both outlined by people of colour, footnotes in a representation of their culture. Various musicians have come out to critique the lack of black or queer characters in a film about jazz and musicals, and it’s a frustrating watch in 2016. ” (“*La La Land* review: an ambitious musical soured by racist undertones,” *Wired culture*, January 10, 2016)
- (18) 「大アクシデント！第89回アカデミー賞作品賞発表ミス顛末」*Elle*, 2017年2月27日。
- (19) “University study finds ‘whitewashed’ Hollywood,” (*The Japan News*, February 23, 2016.)
- (20) “Overall, the landscape of media content is still largely whitewashed,” the study concludes. (*The Japan News*, February 23, 2016)
- (21) 「オバマに盗聴された 根拠示さずツイート」読売新聞、平成29年3月6日。

- (22) 2017年7月にスパイサー報道官が辞任した時の記事である。“So now that you're leaving morning television, we'll have to find something or someone else to watch as we sip our coffee, wondering where and when the White house Easter bunny may pop up again with his baskets of alternative facts.” (“No lie, Spicer made great TV: The beleaguered press secretary resigns, leaving a comic-relief hole in our hearts,” *Los Angeles Times: a Special Section produced in Cooperation with The Yomiuri shinbun*, July 30, 2017.)
- (23) “Disney’s Frozen Whitewashing Controversy,” *Know Your Meme*.
- (24) “Disney’s Frozen Whitewashing Controversy.”
- (25) Nearly 90,000 people petition against ‘whitewashing’ in the live-action version of Mulan,” *Metro News*, Sep. 12, 2016.
- (26) ‘casting white Caucasian actors and actresses in roles originally meant be characters of colour’ had a ‘direct’ and ‘harmful impact’ on both the film and its audience. ‘Whitewashing implies that people of colour cannot be heroes (although they may at times be villains or supporting characters), leaving it far more difficult for countless children around the world to see themselves in the stories they love and think that they too can make a difference.’ (Nearly 90,000 people petition against ‘whitewashing’ in the live-action version of Mulan,” *Metro News*, Sep. 12, 2016.)
- (27) Le Guin, Ursula K. “A Whitewashed Earthea,” *Slate.com*. December 4, 2004.
- (28) ル・グウィン は、これらについて、2009年に出版の評論集でも説明をしている。“The characters are white. Even when they aren’t white in the text, they are white on the cover. I know, you don’t have to tell me about sales! I have fought many cover departments on this issue, and mostly lost. But please consider that “what sells” or “don’t sell” can be a self-fulfilling prophecy. If black kids, Hispanics, Indians (both eastern and western), don’t buy fantasy, which they mostly don’t could it be because they never see themselves on the cover? I have received letters that broke my heart, from adolescents of color in this country and in England, telling me that when they realized that Ged and the other Archipelagans in Earthea books are not white people, they felt included in the world of literary and movie fantasy for the first time.” (*Cheek by Jowl*, p. 5) “My hero and all his people are reddish-brown to black, while the more villainous or barbaric types are white. Some readers notice this, many don’t. Fine, I like my subversions to be more sneaky than preachy. That was a deliberate, political decision, made “outside” the writing.” (*Cheek by Jowl*, p. 113)
- (29) “In a totally invented fantasy world, or in a far-future science fiction setting, in the rainbow world we can imagine, this risk is mitigated. That’s the beauty of science fiction and fantasy-freedom of invention.” “But with all freedom comes responsibility. Which is something these filmmakers seem not to understand.” (Le Guin, 2004)
- (30) “*Oh, come on, it isn’t real. It’s just a fantasy. It’s just a movie. It doesn’t matter.* It does matter. It matters a whole lot. I live in a racially bigoted country. From the start, I saw my Earthsea as a deliberate refusal to go along with the prejudice that sees white as the norm, and the fantasy tradition that accepts the prejudice. If you’re white, ask a colored reader of fantasy whether it matters. Ask them how often they found themselves in fantasy books or movies when they were growing up, and how they felt about it.” “Frankenstein’s Earthsea,” *Locus Magazine*, Oct. 12, 2012.
- (31) Guin, Ursula K. *The Left Hand of Darkness*, Ace, 1969. なお、本稿では、小説から原文を抜き出した場合は、(注)をつける代わりに頁数を記す。抜き出された原文の後に付けてある邦訳は筆者自身による。
- (32) 本節は、以下の論稿から引用している。青木 順子「異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての『我々』と『彼等』のコミュニケーション問題（13）—異文化教育における「幸福」（4）—」安田女子大学紀要 No. 39, pp. 109-124, 2011.
- (33) “And I saw then again, and for good, what I had always been afraid to see, and had pretended not to see in him: that he was a woman as well as a man. Any need to explain the sources of that fear vanished with the fear; what I was left with was, at last, acceptance of him as he was. Until then I have rejected him, refused him his own reality. He had been quite right to say that he, the only person on Gethen who trusted me, was the only Gethenian I distrusted. For he was the only one

- who had entirely accepted me as a human being; who had liked me personally and given me entire personal loyalty; and who therefore had demanded of me an equal degree of recognition, of acceptance. I had not been willing to give it. I had been afraid to give it. I had not wanted to give my trust, my friendship to a man who was a woman, a woman who was a man. (Guin, 1969, p. 248)
- (34) “Story is perhaps the most flexible tool at the disposal of mind. With it we remake reality. We retell events, we imagine alternatives, we figure out how to live according to our desires and according to our needs. The truth of story is not fact. Story tells human truth, serving ethical questioning, human community, and spiritual longing.” (*Cheek by Jowl*, p.133).
- (35) “Tamron Hall leaving NBC in wake of network canceling her hour of ‘Today,’” *CNN*, February 1, 2017.
- (36) “NBC Accused of ‘Whitewashing’ by National Association of Black Journalists After Tamron Hall’s Exit,” *US magazine*, February 3, 2017.
- (37) “Tamron Hall Turns Down Multimillion, Multiyear Deal At NBC: ‘Today’ show co-host Tamron Hall has left NBC News,” *New York Daily News*, February 2, 2017).
- (38) “Megyn Kelly Links Michelle Obama’s Commencement Speech To ‘A Culture of Victimization’ Kelly: ‘I call it cupcake nation. That’s what we’re turning into,’” *Media Matters Staff*, May 20, 2015.
- (39) “NBC Accuses of ‘Whitewashing’ by National Association of Black Journalists After Tamron Hall Exit as network Defends Its Diversity Record,” *People*, February 3, 2017.
- (40) “Trump and Pence vs. ‘Hamilton’ cast: A collision of two Americas,” *The Washington Post*, November 19, 2016. “Trump: Pence ‘harassed by ‘Hamilton’ cast,” *CNN*, November 20, 2016.
- (41) “In the debate that has followed the 2016 Oscar nominations, there is the usual outrage, disgust and, in some parts, indifference or thinly veiled contempt. Robert Redford, from the Sundance festival, said: ‘I’m not focused on that part. To me, it’s about the work, and whatever reward comes from that, that’s great. But I don’t think about it.’ Mr. Redford, of course, already has his Oscar and he doesn’t think about ‘it’ because he has the luxury of not needing to. Charlotte Rampling, who is nominated for a best actress Oscar this year, suggested that all this talk of Hollywood and diversity is racist against white people. ‘But do we have to take from this that there should be lots of minorities everywhere?’ she asked. Let that sit for a minute. Hear what she is saying.” (“The Oscars and Hollywood’s Race Problem,” *The New York Times*, Jan. 22, 2016)
- (42) 実際には、この「白人」の定義は、歴史によっても変化している。他の有色人種との区別において「白人」らしさがはじめて明確に「見える」という性質のためである。白人だけの身体特徴を強調する、つまり、他の有色人種では絶対あり得ないものとすることで、より「白人」を強調できると考える傾向がある。オランダの極右政党「自由党」のウィルダース党首は、金髪に染めている。「ふっくらさせた特徴的な髪型をプラチナブロンドに染めたウィルダース氏には、支持者から記念撮影の求めが引きも切らない。『オランダのトランプ』と称される扇動的な語りは、トランプ米大統領のイメージと重なる。」(『寛容の国』EU占う) 読売新聞、2017年2月28日)
- (43) 「トランスジェンダーの人、米軍勤務認めず」毎日新聞、平成29年7月27日。
- (44) トランスジェンダーである筆者が、トランプの意図は、明らかに弱い立場のマイノリティグループを犠牲にしてブルーカラーの労働者の投票を得ることなのだと指摘している記事である。“I hope those blue-collar voters take a look at how much time, money and other resources were spent studying the readiness and economic impact of allowing trans troops to serve and wonder why their president fired more than 15,000 brave trans people in uniform to play electoral politics at the expense of one of the most under privileged demographics in the country…Trump promised jobs, and he promised to support lesbian, gay, bisexual, transgender and queer people; instead, he’s selling us out for votes.” (“Transgender military ban is cruel,” by Katelyn Burns (special to *The Washington Post*) *The Japan News*, August 1, 2017.)
- (45) 「米白人主義デモで衝突」平成29年8月14日。“The president was silent when journalists asked whether he rejected the support of nationalist groups. The silence was cheered by the white supremacist website Daily Stormer: ‘Whne asked to condemn, he just walked out of the room. Really, really good. God bless him.’ (“Why won’t Trump strongly condemn white nationalism?” (*The Japan News*, August

- 15, 2017.)
- (46) 「トランプ氏『双方に非』」読売新聞、平成29年8月17日.
- (47) 「トランプ米大統領、合法移民削減へ 上院法案への支持表明」Reuters 2017年8月3日, “This competitive application process will favor applicants who can speak English, financially support themselves and their families and demonstrate skills that will contribute to our economy,” Trump said.” (“Trump aims to cut legal immigration.” *The Japan News*, August 4, 2017.)
- (48) ジジエク、スラヴォイ、中山 徹（訳）『脆弱なる絶対』青土社、2001年、p. 87.
- (49) ジジエク、pp. 87-88.
- (50) ジジエク、p. 130.

[2017. 9. 28 受理]

コントリビューター：青木 克仁 教授（生活デザイン学科）